

私が主に使っているのは「PlayEasy」のB2。 レジェールのシンセティクリードとも相性が良い。

ス。適度な硬さのリードを付けければ、ビギナーや初級者にはぴったりだと思います。
「PlayEasy」は、もともとジャーマン用はこのモデルのみ。フレンチ用も最近とても人気が出て来て、フランスのブレイヤーなどにも多く使われているようです。

——ボルシヨスさんはリードは何をお使いですか？

ボルシヨス レジェールのシンセティクリードと通常のケーンズのリードを使い分けています。ケーンズの方はダダリオ（旧リコー）の「エヴォリューション」の4番。ケーンズのリードは「PlayEasy」ともとても良く合うようです。実は今日の取材前に「PlayEasy」を改めて試してみたら、とても気に入ってしまいました。2週間前にもグローバルでB2を選んだばかりなのに（笑）。

NICKはレジェールのシンセティクリードとも相性が良いのですが、例えばB3にレジェールのリードという組み合わせなど、初心者にはとても良いかも知れない。ほかに、面白いことにNICKはレジェールのソプラノサクソフォンのリードとも相性がぴったりで、これは日本でも一部の人たちの間ですでに有名です。

セルビアに生まれ、大学2年目にオーストリアに留学

——ボルシヨスさんはセルビアのご出身ですが、ベームシステムで始めたのですか？

ボルシヨス セルビアやハンガリーではベームシステムが一般的です。私は生まれは

セルビアですが、両親はハンガリー人。

——どういった勉強をして来られたのか、ざっと教えてください。

ボルシヨス 9歳でクラリネットを始め、普通の学校に行きながら週に2日間、午後町の音楽学校に通いました。とても良い先生に恵まれてクラリネットを吹くのは楽しかった。10歳で首都ベオグラードのコンクールに優勝するとモチベーションも上がり、ゲーム感覚でいろんなことに挑戦しながらどんどん上達して行きました。17歳でセルビアの音楽大学に入り、1年目を終えたときにオーストリアのグラーツ国立音楽大に留学し、有名なペーラー・コヴァーチ教授に師事しました。

——子供の頃の音楽環境はどうだったのですか？

ボルシヨス CDなどはまだ無かった頃です。毎週月曜にベオグラードのラジオ局がリスナーのリクエストでクラシック音楽を流す番組があり、子供だった私も恐る恐る「シニターミッツのクラリネット協奏曲をお願いします」と電話をかけてみた。そしてある日「これから××村のロベルト君のリクエスト曲、シニターミッツとモーツアルト、ウエーバーのクラリネット協奏曲をお送りします」というアナウンスが流れて来てビックリ（笑）。慌ててテープレコーダーの録音ボタンを押したのを覚えています。

——コヴァーチ（1937年生まれ）先生からは何を学びましたか？

ボルシヨス 音のとても美しい人で大きな影響を受けました。彼は天才的な人で、驚くべきことに私が習っていた頃の方が（コヴァーチ氏は師匠）音色はそれまでよりずっと良くなっていました。コヴァーチはジャーマンシステムで始め、後にベームシステムに移った人です。クラスの学生はジャーマンとベームが半々でした。私が習ったもう一人の先生、ウーレン交響楽団首席のゲラルト・パッヒンガーも素晴らしい人です。とてもシャイな人ですが、演奏も指導も人間もあれ以上の人はいないと思うほどの先生です。

——2007年に兵庫芸術文化センター管弦楽団に入団した時が初来日？

ボルシヨス そうです。それまで日本のことはほとんど知らなかった（笑）。前にも

話が出たミュンヘンフィルの友人が当時、兵庫のオケにいて、彼から「雇って一つやうから受けてみないか」と誘われたんです。メンバーはみんな若くて国際的だと聞いて、そんな中で演奏するのは楽しいだろうと思つた。それで録音を送り、ミュンヘンで佐渡（裕）さんのオーディションを受けました。

——日本の第一印象は？

ボルシヨス 食べ物美味しい！（笑）人々もみんな親切で、世界にこれ以上親切な人たちはいないんじゃないかと思うほど。もちろんオーケストラのレベルも非常に高く、みんな真剣に練習してベストを尽くそうとしているのは素晴らしいことです。

ただ、2010年に名古屋フィルに移り、私の生活はガラリと変わりました。それまでは独身で気楽に暮らしていたのが、結婚して可愛い娘もできたことで、責任が増えたと同時に、家族と一緒に暮らす幸せを今は感じています。

